



ねらい

時間の流れと産婦人科生物学 —早すぎること、遅すぎること、長すぎること、短かすぎること—

「時間の流れは必ずしも一定ではない」ことは、幼いときには直感的に理解されている。楽しく遊んでいる時間はあっという間に過ぎてしまうが、つまらない話を聞かされている時間は無限に続くようだ。その後いったん時間が一定の速さで流れることを教えられてその常識のなかに囚われるが、やがて特殊相対性理論を学ぶに及んで時間の流れる速さは観測系の速度に依存することを発見する。あるいはもしかしたらプルーストの「失われた時を求めて」を読んだときやタランティーノの「レザボア・ドッグス」を観たときに、時間の流れが非線形であることに心地よさを感じるのかもしれない。

産婦人科はほかのいくつかの診療科とともに、「時間」や「周期」を意識せざるを得ない領域の1つである。生殖内分泌の検査をするときには「月経X日目」であるかを明記しなければいけないし、周産期の診療を行う時には「妊娠Y週Z日」が必須の情報である。そして女性医学はあらゆるライフステージにおける女性の健康を縦断的に扱う分野なので、思春期・性成熟期・更年期・老年期と流れていく年単位の時間をいつも念頭におかなければならない。

もはや旧聞に属するが、2017年のノーベル医学・生理学賞は時計遺伝子を発見したホール・ロスバッシュ・ヤングの3名に贈られた。「体内時計」「概日リズム」等の用語は人口に膾炙し、日常会話のなかに飛び交う。これらの問題を扱う「時間生物学」は、ありとあらゆる領域に展開し、それは産婦人科も例外ではない。本号の特集「時間の流れと産婦人科生物学」ではこのような認識を基に、まず時間生物学の分野における大家の先生方に基礎的な総論をお願いし、全体の俯瞰を試みた。さらに生殖内分泌学・周産期医学・女性医学の各分野において、一方では時間生物学の最新の成果を活かした研究をされている先生方、他方では産婦人科学分野に古典的に内在する何かが時間的に「早すぎること、遅すぎること、長すぎること、短すぎること」の病態に関して卓見をお持ちの先生方に、それぞれ概説をお願いした。

忙しい診療の合間に本号を手になされ、読み進めるうちに思わず「時を忘れて」いただければ本望である。

(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科茨城県地域産科婦人科学講座 寺内公一)